



Title	助詞「へ」の歴史的研究
Author(s)	黒星, 淑子
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105359
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (黒 星 淑 子)	
論文題名	助詞「へ」の歴史的 research
論文内容の要旨 助詞「へ」の通史的な拡張過程については、これまでの研究によってかなり明らかにされてきた。しかし、これまでの研究では「へ」の係る動詞を中心としたものであったため、上に接続する名詞句については未だ問題も残されている。上に接続する名詞句は「言語主体から遠い所」を指すのが本義であったが、平安時代以降には次第に狭い場所を示す用例が増加する。このように「へ」の上に接続する名詞句は範囲を広げ、更に「告げる」のような発話を表わす動詞に対してはその動作の向けられる人物を表わす名詞句が用いられるようになる。このように場所をの動作の向けられる人物を表わす名詞句が用いられるようになる。このように場所を示す語から人物を示す語への流れが説明されるが、その拡張過程の詳細については明らかにされていない。 そこで本稿では、助詞「に」との比較のもとに、助詞の上に接続する名詞句が人物を表わす名詞句を取るに至るまでの用法拡張の過程を明らかにする。また、その拡張過程における中世期の資料では、「へ」の接続する名詞句が人物を示す語の場合、その人物の身分は高位に偏るという現象がある。この点についても改めて詳細な調査と検討を行う。 ことに着目するのは、場所性名詞と婉曲表現との関わりである。平安時代以降、係る動詞に発話動詞が加わることによって「へ」の上接名詞句が文脈的には人を表わすようになったのであるが、その場合直ちに場所性が失われて人物そのものを表す名詞句が立つようになった訳ではなく、一時的には場所の一種である建物を表す名詞句が置かれるという現象が見える。このことと関連して、発話動詞の聞き手を表す名詞句における「へ」と「に」の違いにおいて動詞の待遇表現に着目した場合、明らかに「へ」が主語下位待遇の表現に偏るという現象が見えるのであるが、この現象がいかなる理由によるものなのか明らかではない。本章では、場所を示す語から人物を示す語を取るまでの「へ」の通史的過程のもとに、「へ」の特徴的用法と待遇表現との関りを検討する。 結果として記述するのは以下の点である。「へ」の上に接続する名詞句が場所を表す名詞句から人物を表わす名詞句へと拡張する過程において、「殿」「宮」「院」のような建造物を表わす語の接続した名詞句の存在が確認される。この建造物を表わす名詞句は場所としての建造物を表わすと同時に、婉曲用法として高位人物も表わすという二面性を持つ。この二面性ゆえに建造物を接続した名詞句は人物を表わす用法に繋がり、結果として、人物を表わす用例の待遇差を生じさせる現象の要因になったと考える。 第3章では、2章で取り上げた「へ」の特徴的傾向をもとに平家物語諸本を対象として調査を行う。調査において注目するのは諸本を通して見た場合の「へ」と「に」の用法の違いである。『平家物語大事典』には、諸本の本文が現存本に至るまでの過程で相互に影響し合い、しかも複雑な過程を辿っていることが記述されている。そこで語り本系における屋代本と覚一本との同一場面の用例を比較すると、異なる点を確認される。例えば、覚一本における「へ」の用例と屋代本を比較したものであるが、ここでは同一か所において共起する動詞が異なることが確認される。その他にも、屋代本では「に」となっているものが、覚一本では「へ」で表される箇所がある。また、屋代本では「殿」接続の名詞句となっているものが、覚一本では場所を示す語となっている用例も確認される。このように上接名詞句、助詞、動詞の三者それぞれの語を比較した場合には、諸本相互に異なる点が認められる。では、助詞「へ」と「に」の用法として見た場合には、どのようなになっているのか、という点が疑問となる。この点を明らかにするために、古本系の平家物語諸本を対象と	

して、古本系 諸本における「へ」の特徴と「に」との相違点を明らかにすることを目的として調査を進める。

調査により、読み本系と語り本系の古本系諸本において、上接名詞句における「へ」の特徴と「へ」と「に」の違いが諸本を通して認められるという結果を得た。これまで注目されなかった助詞の用法において、同時代の諸本が時代の変化に応じて表されていたことを新たに指摘した。

第2部、第4章では移動表現における問題を取り上げる。

これまでの研究において、院政期以降の「へ」は平安時代に有していた「に」と異なる特性が失われて行き、その反面作用として新たな用法を獲得していく。とすると、特性が失われる中で

「へ」と「に」との共存が認められる場合、果たして両助詞に違いがあるのか疑問となる。そこで院政期以降の資料となる高野本『平家物語』を観察すると、命令や仮定などの一部の表現形式では「に」は確認されず、「へ」のみで表されるという偏りが見られる。その偏りに注目して、各表現形式の意味内容を中心に比較調査を行った。結果として以下のことを記述した。

鎌倉時代、高野本『平家物語』の移動表現における「へ」と「に」には、表現の確定性や間接性と深く関わる機能的差異が認められる。特に、「へ」は未実現の事態や間接的な否定、推量的な方向性を表す際に用いられる傾向が強く、確定的な存在を表す際に用いられる「に」とは異なる。この違いは、「へ」と「に」のそれぞれの特性による違いとして捉えられるのではないかと。つまり、「へ」が方向性のみを表し、着点に至るか否かは問題としない特性が、着点に至らない意を含む未確定の事態や、未実現の事態の表現に繋がる。一方の「に」は帰着すべき場所を示すという特性ゆえに、到着地点が確認される完了した事態の表現に限定される。その特性と表現の意味内容との繋がりが表現形式の違いとして現れたものだったのではないかと。このように考えるならば、方向と帰着点という特性はすぐに失われるのではなく、動詞による表現から助動詞による表現、そして表現形式に伴う意味から、表現の形式という過程を経て行く。高野本『平家物語』における表現形式の違いは、その通史的変遷過程の一端を示したものとして捉えることも可能ではないかと考える。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (黒 星 淑 子)				
論文審査担当者	(職)	氏 名		
	主 査	大阪大学	教授	岸本 恵実
	副 査	大阪大学	教授	岡島 昭浩
	副 査	大阪大学	准教授	北崎 勇帆
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 助詞「へ」の歴史的研究

学位申請者 黒星 淑子

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 岸本 恵実

副査 大阪大学教授 岡島 昭浩

副査 大阪大学准教授 北崎 勇帆

【論文内容の要旨】

本論文は助詞「へ」の歴史の変遷を、中世期の用例を中心に、とくに上接する名詞句に着目し、近似的な用法を持つ助詞「に」との比較を通して考察したものである。

本論文は、「はじめに」、第 1 部「発話表現における助詞『へ』の用法」、第 2 部「移動表現における助詞『へ』の用法」、「おわりに」から構成され、あわせて「凡例」「既発表論文との関係」「参考文献・参考論文」を付す。

第 1 部第 1 章「助詞『へ』の上接名詞句について―〈人物〉を受ける『へ』についての一考察―」では、動詞を発話動詞とする場合、中世期における「へ」の上接名詞句が、「具体的な使者・隔たり表現があるもの」から「具体的な表現はないが状況により隔たりが判断されるもの」、更には「隔たりの要素が認められないもの（方向性）」へ変化していく過程を明らかにした。また、隔たりの要素が見出せない用例は、上接名詞句が高位の人物であることを指摘した。

第 2 章「助詞『へ』の上接名詞句についての一考察―場所から人物への拡張―」では覚一本『平家物語』の調査に基づき、発話動詞に用いられる「へ」の上接名詞句では、「へ」が場所名詞から人名詞に拡張される過程で、建造物を示す語や、「大将殿」のような「人物を示す語に建造物を接続した名詞句」がみられることを明らかにした。これにより、建造物を示す名詞を介して間接的に人物を表す用法を経て、「へ」の上接名詞句が人名詞へと拡張した可能性を推測した。

第 3 章「平家物語諸本における助詞『へ』の用法―発話動詞に係る『へ』と『に』の用例を中心として―」では、平家物語諸本のうち、読み本系と語り本系の古本系諸本を対象に調査を行い、上接名詞句における「へ」の特徴と、「へ」と「に」の用法差が、章句に異同を持つ諸本間にあっても、共通して認められることを示した。

移動動詞を対象とした第 2 部第 1 章「高野本『平家物語』における『へ』と『に』―『方向』と『帰着点』との関係についての一考察―」では、「へ」が未実現の事態、間接的な否定、推量的な方向性を表す際に用いられる傾向が強いのに対し、「に」は確定的な存在を表す際に用いられることを示した。これにより、院政期以降においても、「へ」は方向性、「に」は帰着点を表すという基本的な用法を継承していた可能性を指摘した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、「へ」の用法変化が進行していたと考えられる中世期の資料のうち、人物関係や文脈が比較的明確であり、かつ一定数の「へ」と「に」の用例を収集することが可能な『平家物語』を調査の中心に据えた研究である。従来必ずしも通時的・分析的に十分論じられてこなかった「へ」の変化について、近接した用法を持つ「に」と比較しつつ、「日本語歴史コーパス」等を用いて、係る動詞および上接名詞句をそれぞれ分類・整理し、考察を行った点に特徴がある。

本研究の意義として、まず、コーパスや索引類を活用し、歴史的文献から多数の用例を収集したうえで、資料横断的な分析をおこなった点があげられる。さらに独自性が高いのは、先行研究においては、係る動詞が移動動詞から拡張される様相や「に」との相違点に注目されてきたのに対し、本論文では上接名詞句の変化を明らかにした点である。すなわち、「へ」が係る動詞は、奈良時代には移動動詞に限られ、上接名詞句は場所を表す名詞に限られていたが、中世期には「告ぐ」等の発話動詞へと拡張され、上接名詞句も人を表すものへと拡張した。本論文では、その過程が場所名詞から人名詞に一気に進んだわけではなく、「大将殿」のように、人を示す形態素と建造物を示す形態素とを併せ持つ名詞句が介在した可能性を指摘している。

一方で、本論文には、問題設定に対して必然的な分析方法が明示されないまま調査結果が提示されている点、研究史上の位置づけが必ずしも明確にされているとは言えない点、用語の選択が適切と言い難い箇所が散見される点など、論証上の課題も認められる。また、長期間にわたり本テーマに取り組んできたことにより、研究手法や対象資料、関連研究の進展を背景として、論の枠組みや方法論、記述に不統一が生じ、本論文の新規性と一貫性がやや損なわれている点は惜しまれる。

しかし、これらの点は、仮説に必ずしも沿わない用例を含む歴史的文献を誠実に分析した結果とも評価できるものであり、膨大な用例分析の積み重ねに基づく着実な考察が行われている。また、中世以降現代に至るまでの「へ」の変化や、方言地理学的観点から見た地域差、場所性名詞をめぐる通言語的比較など、本論文執筆の過程で視野に入れられながら十分論じられなかった点は、本研究の今後の発展の可能性を示すものといえるだろう。

以上の理由から、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。